

論文の内容の要旨

氏名：王 梓玥 WANG ZIYUE

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：都市体験と郁達夫

郁達夫は、中国現代文学史上重要な作家である。彼は生涯に中国と日本の多くの都市を流転した。これらの都市は郁達夫の人生の中で重要な居住地となる一方、そこで彼は重要な作品を次々と生み出していった。都市の生活体験は、郁達夫の創作理念、審美観、恋愛観、婚姻観、社会観などに大きな影響を与えた。

都市がグローバル化する流れの中で、郁達夫の都市生活の体験は、生活空間の変化だけではなく、彼の精神生活にも影響を与えた。日本に留学した郁達夫は、祖国、故郷を想う一方で、弱国の民としての苦悶を抱えていた。西洋と日本の文化が彼を啓蒙し、それまで体験したことのない都市生活は、彼に衝撃を与え、感情や衝動を解放する欲求を強めた。また、その後、中国の各都市での生活体験は、郁達夫の思考様式や心の拠り所へと導くのに重要な役割を果たしている。

本論は郁達夫の文学創作に影響を与えた都市を選び、日本の東京、名古屋、中国の上海、北京、杭州を研究対象として、郁達夫の各都市における生活体験と創作の関係を系統的に考察し、都市生活、都市文化、そしてそれら各都市特有の自然が、いかに作家の創作に影響を与えたかについて考察した。さらには、彼の作品の分析を通じて、当時の中国の作家の生存と精神の状態、都市生活における思想や文学創作の変化にまで論及した。

本論は六つの部分に分かれる。序では、研究動機と目的、先行研究、研究方法について明らかにした。

郁達夫は「自叙伝的小説」を提唱した作家であり、彼の作品は彼の现实生活に深く繋がっている。郁達夫は故意に都市について書いたわけではないが、彼の作品の中には都市に関する多くの描写や夢想がある。

郁達夫は中国の伝統的な田舎から海外の都市に居を移し、そして海外の都市から中国の現代都市に戻って生活した。彼は都市のイメージとして、街路、劇場、公園、学校、旅館、病院、遊郭など、各都市の代表的な風景を選んでいく。都市のいたるところで見られるこれらの風景は、田舎の風景とは異なり、作家に違った感覚を与えたに違いない。彼の都市体験は、独特なものがあり、本論ではそれに注目して、都市体験は作家の創作活動の形成にどのような影響を与えたのか、都市空間の構成が作家にどのような体験や感情をもたらすのかを考察した。

これまでの郁達夫研究は、郁達夫の作品の起源に集中し、作品の特徴と価値、外来文化の影響などについての考察、同時代作家との比較などが多かった。郁達夫が接した都市文化と、それが作品にもたらした影響についての研究は少なく、また系統的な分類分析は皆無である。したがって、本論ではそのような点に留意しながら、先行研究を補完すべく、関連資料の収集とその検討を行ない、そのうえで、中国現代作家と都市との関係の考察も試みた。

研究方法としては文献研究法と比較研究法を用い、都市の生活体験の郁達夫に対する影響について考察した。

第一章では名古屋と東京における郁達夫について考察した。郁達夫が日本にいた十年間は、日本の大正期にあたるが、日本の歴史の中でも、大正期は特異な時期である。この頃には、政治、経済、文化、人々の日常生活が大きく変化した。大正期の日本文学は、ヨーロッパの自然主義、ロマン主義、耽美主義、リアリズムなどを吸収した。この時期の日本文壇には、さまざまな流派があらわれ、永井荷風、谷崎潤一郎、太宰治、志賀直哉、佐藤春夫、厨川白村等、多くの優れた文学者を生み出した。このうち、佐藤春夫と厨川白村については、本論でも特に紙幅を割いて論じた。またこの時期は、日本近代文学の一大転換期とも言えるが、郁達夫はその衝撃を身をもって体験した。

しかし、日本の都市のエキゾチックな文化は、郁達夫のような留学生たちに大いなる刺激を与えると同時に、弱国の民である自分たちへの強い劣等感を抱かせ、その一方で文化的アイデンティティの危機をもたらした。多くの中国人留学生と同じく、日本の都市体験は、他国での生活の苦しさや無力感を郁達夫に与えた。そして彼は孤立し強い危機意識を抱くようになる。金銭にまみれた物質的な都市空間で、郁達夫は欲望にかられ、またそのような自分を恐れた。彼は性の苦悶と生の苦悶について思考し始める。伝統と

現代の対立と不安の中で、やがて郁達夫の自己意識が目覚め、日本の都市生活の体験と豊富な読書量が、彼の創作意欲をかき立てた。日本の文学上の先人たちとの交流や励ましもあり、郁達夫の基本的創作理念やスタイルは日本で形成された。

第二章では上海の郁達夫について検討した。卒業後、郁達夫は日本から上海に帰国した。この頃の上海は、中国の田舎から逃避してきた封建的な思想と、国際的・現代的な思想が交錯する半植民地的な都市であった。ここでは、郁達夫は都市に生じる様々な思想の衝突と社会の激動を感じた。1921年10月、郁達夫の短篇小説集『沈淪』の出版は、社会に大きな反響を巻き起こした。『沈淪』は、郁達夫の日本留学体験をもとにした自伝のような色合いを持つ作品である。小説の中には、大胆な暴露的描写があり、それについて多くの論争が起こった。その中のリアルな孤独感、辛さ、苦悶、感傷は、故郷を離れて上海で生活する多くの若者の心に響いた。彼らは、郁達夫の小説に自分自身を投影し、人生のもうひとつの可能性を見出し、それを受け入れたのである。上海の自由な出版環境と読者の美意識の選択は、郁達夫の小説が評価される状況を生み出していた。『沈淪』出版のセンセーションは、郁達夫の創作に大きな励みとなり、創作の道を明確にし、執筆を続けることができるようになった。

上海の代表的な空間は弄堂、外灘、亭子間などであるが、全て郁達夫の小説の中に表われている。これらの空間は、人物の物語の背景になりつつ、物語の進行上の重要な役割を果たす。郁達夫の上海滞在時の作品は、自分の内的な苦悶だけに注目しているのではなく、抑圧された下層社会の人々に視線が向けられる。「春風沈酔の夜」、「空虚」、「茫茫夜」等は、当時の上海の階層社会の暗い現実を背景として、社会の真相を暴いている。彼の上海での創作は、全体的に上海の現実が直接的にまたは、間接的に反映された哀れで抑圧的な心情が基調である。これらの作品が描いたインテリは皆、理想と志を持ちながら、暗い現実の中で挫折を味わうことになるが、現実と折り合いをつけようとせず、ジレンマを抱えたままである。

第三章では北京の郁達夫について検討した。郁達夫は3回北京に行っており、その中で一番長かったのは1923年から1926年の4年間である。郁達夫にとって、北京はもはや地理的な概念ではなく、再適応しなければならない新しい空間であった。北京と上海の全く異なる文化的雰囲気は、彼に新しい思考と選択肢を与えた。1923年、郁達夫は北京大学で自分の得意とする文学ではなく、統計学を教えており、退屈な仕事に、不満を覚えた。郁達夫は、自分のことを、社会から見捨てられ、悲劇的な運命から逃れられない余計者と感じ、彼は北京に住んでも、北京に帰属意識はなく、短編作品「余計者」（「零余者」）を創作した。郁達夫は、北京の街をさまよい、都会の人々から距離を置き、身を局外に置いた視点で世界を観察している。

当時、郁達夫と同じ体験をしたインテリは多く、郁達夫が作品の中で描いたインテリは皆、ひどく痩せこけており、神経質で、非常に繊細である。彼らは高い文化的教養を持ち、現代人の精神を持っているが、自らの運命を掌握する力はない。彼らは社会の暗闇を憎み、自らの惨めさを嘆く、覚醒者として世界を見直した。自分たちが社会にとって余計な存在であることを知りながら、また沈淪するのも悔しいまま、最終的に、苦悶の中でもがくしかない。彼は北京の下層階級の暗闇を批判する一方で、自然の美しさや風習を賞賛している。自然の景色は、彼に世の中の苦悶を暫く忘れさせた。

第四章では杭州の郁達夫を扱う。杭州は、郁達夫にとって思い出の地であり、憧れの都市であった。他の都市は彼に緊張や不安を与えたが、杭州と向き合うことで安心感を得た。郁達夫の杭州は、江南の風情を漂わせ、淡く清らかな描写は、読者を静かで優しい雰囲気へ導いてくれる。郁達夫の杭州を舞台とした小説の中の主人公は、もはや感傷や苦痛、憂鬱に満ちた余計者ではなく、自由闊達な人生観を抱いている。

彼が杭州で「風雨茅廬」を建てたのは、沈淪の運命から逃避し、悠々自適の隠遁生活を送るためである。しかし、胸の内では中国の将来を心配しており、世の中の不安状況はまだ彼を悩ませていた。彼はいずれにしる現実から逃げられないと気付いた。1938年、杭州で隠遁する夢が打ち砕かれ、郁達夫はシンガポールに向けて出発した。

結語では、以上の研究と考察を次のようにまとめた――

郁達夫は生涯に多くの都市を変遷した。彼の敏感な神経と率直な性格は、それぞれの都市について鋭くて、深い観察を行い、様々な都市体験を活かした作品を創作した。日本の名古屋と東京、中国の上海と北京、杭州が、郁達夫の文化や文学に関する意識を発展させ、創作モチーフや創作スタイルにも大きな影響を与えた。これらの都市の歴史や文化そして人々の息吹は、彼の作品に反映され、彼の人生にとっても大きな財産となった。

これらの都市文化は彼に豊かな生活体験と精神力をもたらし、それぞれ異なる歴史・文化の背景や景観は、郁達夫に人間存在を見直す機会を与えた。都市に対する想像と思考を働かせることで、最終的には独特な都市体験文学を完成し、中国現代文学史に重要なものを残した。そして、郁達夫の都市体験は彼だけのものではなく、当時の他の中国の現代作家たちの現代社会における都市体験を代表しているとも言える。